

標識鳥に関する二・三のとりまとめと考察

玉 田 誠

Some memorial descriptions and investigations
on the banded swans.

Makoto Tamada

140 環 境 庁 JAPAN
01012

旧 金 属 環

KANKYOCHO JAPAN 150 -	0 0 8 4	0 0 8 4	0 0 8 4
	0 0 8 4	0 0 8 4	0 0 8 4
	0 0 8 4	0 0 8 4	0 0 8 4
	0 0 8 4	0 0 8 4	0 0 8 4

新 金 属 環

はじめに

1. 壽沸湖で標識されたオオハクチョウについて
 2. 標識鳥の観察と回収情報から
 3. 壽沸湖で確認された標識鳥について
 4. 小湊での着標鳥の壽沸湖以外での確認
 5. 標識鳥のリサイトについての提言
- 付 録 サハリンのオオハクチョウとの対比
謝 辞
サマリー

文献等一覧

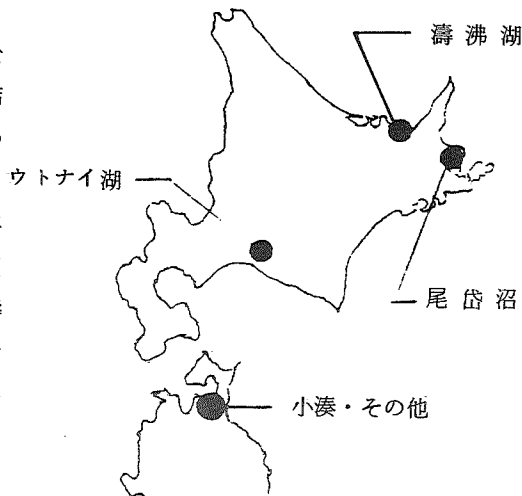
はじめに

壽沸湖は北海道網走支庁管内のオホーツク海岸に点在する海跡湖の一つで、その面積2,051ヘクタールの壽沸湖鳥獣保護区の中心をなすものである。この壽沸湖を渡りの中継地として利用しているものの一つがオオハクチョウであって、コハクチョウは稀に小数羽が混在するにすぎない。

日本で越冬するオオハクチョウのここ11年間の平均的な値は約12,000羽程度である。その内の25パーセント内外は壽沸湖を経由することが明らかであるが、極東地域のどこと直接的に結びつくのか（多分サハリンの南部地域と推定）明らかでない。

つまり壽沸湖はオオハクチョウの、秋には日本に於ける最初の足がかりの土地であり、春は最終的な集結と北帰に適する天候待ちのための数少ない拠点の一つとして極めて重要な存在である。

日本でのオオハクチョウに対する標識作業は1975年に開始され第1図に示す4地点で1981年春までに172羽に標識された。この内の31羽約18.02パーセントが壽沸湖でリサイテングされている。これ等の標識鳥の行動を尋ねて東北地方（主として小湊）と北海道の湖沼と壽沸湖との結びつきを明らかにし、ソ連極東地域で回収された日本での標識鳥もあるので、その点に関しても多少言及すると共に標識鳥に関して、その観察内容について提言する。



第1図 日本に於けるオオハクチョウに対する標識作業地

1. 壽沸湖で標識されたオオハクチョウについて

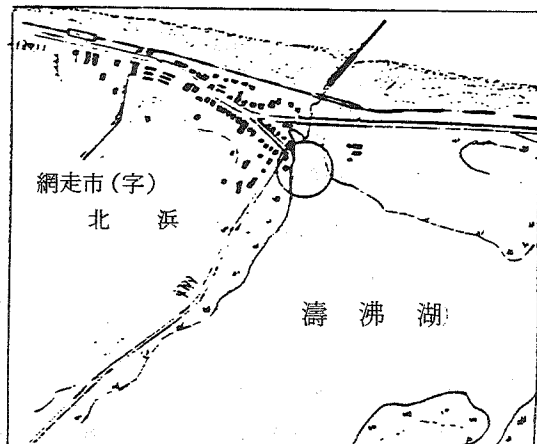
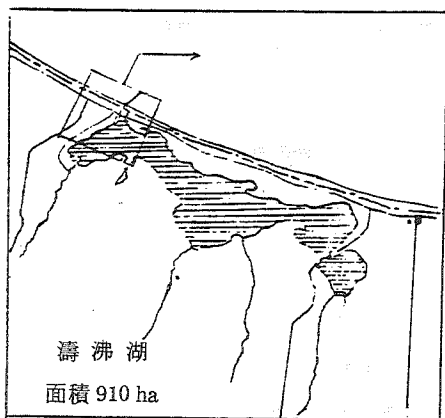
1975年春以来1981年の春までに日本に於て標識されたオオハクチョウについて年別、着標地別に整理したものを第1表として下に示す。青森県の小湊（浅所海岸）と尾岱沼（春別川河口）で着標されたものが82パーセントにも達しているが、結果的に見てこの両地を選んだことは賢明であったといえる。

第1表 年別・着標地別着標数

	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	計
小湊	5	3	11	12	3	16	13	63
尾岱沼			15	28	3	* 23	18	87
ウトナイ湖				4		6		10
壽沸湖		4				1	3	8
その他					3		1	4
合計	5	7	24	44	9	46	35	172

その他 野辺地川口……3、野辺地馬間海岸
 * 1977年尾岱沼で着標された1C37を2C27に換装

以上の内壽沸湖で着標されたものについては第2表の通りである。着標作業は山階鳥類研究所のスタッフにより行なわれてきたが、1981年の3羽は本会会員の手によってなされた。第2図は着標域を示す。



第2図 壽沸湖(二級ステーション) 及着標域(網走市字北浜)

右の8羽の内1C12については唯一度もリサイトの報告に接しなかったが、1982年1月23日小湊において首環(N・B)脱落の状態でリサイトされた。(後出)

又2C80についての情報は得られていない。残り6羽についての行動は下記の通りである。

第2表 壽沸湖での着標鳥

記号番号	着標年月日	年令性別	着標者
1C02	Mar. 15'76	Adu	山階鳥研
1C10	"	Adu	
1C11	"	Juv	
1C12	"	Juv	
2C46	Feb. 28'80	2Y ♂	新田 令 日下部正幸
2C79	Apr. 8'81		
2C80	Apr. 10'81		
2C81	Apr. 13'81		

1C02 76年の秋 77・3・13 77・11・6—78・3・12 78・3・13—78・4・2
 不明 屈斜路湖 屈斜路湖 壽沸湖

1C10 76・11・8—77・3・6 77・3・23—77・3・27 77・4・27
 屈斜路湖 利別川 育素多沼
77・11・4—77・11・10 78・3・9 78・4・27—78・5・2 78・5・2
 屈斜路湖 利別川 育素多沼 茂岩橋上流

1C11 76・12・2—77・1・3 77・3・?—77・3・27 77・3・31—77・4・8
 壽沸湖 尾岱沼 壽沸湖
77・12・8—77・12・24 78・1・4—78・3・26 78・4・1—78・4・27
 壽沸湖 尾岱沼 壽沸湖

2 C46	80・11・15	└	80・12・14	80・12・20	└	81・2・16	81・3・9	└	81・4・10
			壽沸湖			屈斜路湖			壽沸湖
	81・10・29	└	82・1・23	82・1・23	└	82・2・16	82・2・18	└	82・4・11
			壽沸湖			屈斜路湖			壽沸湖

2 C79	81・10・30		81・11・10	└	?	82・4・9	└	82・4・11
			壽沸湖		大湊湾			壽沸湖

2 C81	82・1・28	└	?	82・2・4		?	└	82・2・6
			平川		瓢湖			平川

以上6羽の行動からみると1C02、1C10、2C46の3羽は屈斜路湖で、1C11は尾岱沼で又2C79、2C81の2羽は大湊湾及びその付近で越冬した経験をもち、北帰の途中壽沸湖に立ち寄って着標されたものと考えられる。又1C11や2C46のように結氷期を除き日本での大半を壽沸湖で過すのは観光客の投餌に主因があるように思える。1C10はその行動から見ると何故壽沸湖に飛来したのか理解に苦しむ。(着標期は4月19日迄在湖した)

結氷期以外は着標地(かつての越冬地)にもどらず壽沸湖で暮らす鳥に1C22がいる。この鳥は1977年2月13日に小湊で着標された成鳥の雌であるがその行動を記してみると。

76年期	77・2・15	└	77・3・1	77・3・12	77・3・14	└	77・4・7
			小湊	厚岸湖			壽沸湖
77年期	77・11・12	└	77・12・24	77・12・29	78・3・25	└	78・4・22
			壽沸湖	小湊			壽沸湖
78年期	確認記録なし						
79年期	79・11・8	└	80・4・27 (M. R. = メタルリングのみ、以下同)				
			壽沸湖				
80年期	80・12・10	└	80・12・14	?	81・3・21	└	81・4・7
			壽沸湖				壽沸湖
81年期	81・10・27	└	81・12・16	?	確認できず		
			壽沸湖				

76年期と77年期とはN・B=ネックバンドによって確認されていたが、79年期以後はメタルリング(140環境庁JAPAN01022-1980年3月23日確認)鳥相、伴っている幼鳥数等によって確認してきた。78年期に確認できなかったのは、この時点ですでにM. R.のみになっていたものと考えられる。同様の理由によって80年期と81年期の越冬地での確認ができなかったものであろう。

(同様ケースに尾岱沼に定着してしまい着標地小湊に全くもどらなくなった1C09もある。)

2. 標識鳥の観察と回収情報から

日本に於ける着標鳥は一部例外はあろうけれども大部分は人工給餌にたよった鳥である。そのために中継地や飛来地にあつては必ずといっていい程給餌地点に姿を見せるといってよい。このことが着標鳥の高いリサイテング率につながっていると考えられる。1982年3月現在ネックバンドの喪失鳥は第3表に見るように1C群で27羽、2C群で7羽が判明しているがそれでもリサイトできるということは給餌点に姿を見せるからにはほかならず、日本の特徴と言ひ得るかと考える。さらに又第4表に示すようにネックバンド、フットバンド共に喪失してメタルリングのみの鳥さえ確認された例もある。

第4表 メタルリングのみの標識鳥

記号番号	場所	年月日	備考
1C04	小湊	79.11.5	最終リサイト (小湊 '75)
0534	大湊	80.12.30	"
1C70	尾岱沼	81.3.11	" (尾岱沼 '78)
1C22	濤沸湖	81.12.16	" (小湊 '77)
1C21	小湊		
1C70	尾岱沼		

*1981年期中に濤沸湖では1C22を除きメタルリングのみの鳥が3羽確認されている。〈 〉内は最終リサイト月日。

右足〈Dec.7〉左足〈Nov.26〉右足〈Apr.3〉

濤沸湖の1C22について 右足にメタルリングのみのオオハクチョウを発見したのは1979年11月8日で、この鳥がペアであり且つ幼鳥を5羽伴っていることに気付いたのは11月18日であった。他に7羽の一家族が1組いたが、親鳥の鳥相及び幼鳥の白色毛の量ではっきり区別できた。したがって観察時間帯に多少の距離があつてメタルリングの有無がわからなくても確認することが可能であった。1980年期中も同様な手段で識別した。1981年春、結氷期以後幼鳥が4羽と2C54のネックバンドのついた幼鳥を伴ったペアを発見したが片親の右足にメタルリングのみが装着されていることも判明したがリングのNo.を読みとることは成功せず、したがってネックバンドのNo.も不明である。但し2C54は1981年2月14日に小湊で装着されているので、濤沸湖(秋) - 小湊(結氷期) - 濤沸湖(春)と移動したことがわかる。ちなみに2C54は81年期中にはどこでもリサイトされなかった。

次に標識鳥の国内での回収状況をまとめたものが第5表であるがこれを見ると着標されて幾程もしない内に死亡していることに驚かざるを得ない。

第3表 ネックバンドの喪失鳥

記号番号	着標		81年期中の確認地
	年	地名	
1C04	75	Km	
12	76	Tf	Km
20	77	Km	
21	"	"	
22	"	"	Tf
29	"	Od	
44	78	Km	
45	"	"	
48	"	"	Kn
49	"	"	
54	"	"	Km
55	"	"	Km
56	"	"	
60	"	Ut	Ut
65	"	Od	
70	"	"	
77	"	"	
78	"	"	
82	"	"	
83	"	"	
85	"	"	
90	79	Nh	Nh
2C01	80	Km	
04	"	"	
10	"	"	Km
17	"	"	Ut
18	"	"	Ut
35	"	Od	
53	"	"	

Km - 小湊 Tf - 濤沸湖
Od - 尾岱沼 Kn - 小沼
Ut - ウトナイ湖 Nh - 野辺地川

第5表 標識鳥の回収状況

記号 番号	年令 性別	着 標		回 収		備 考
		年 月 日	着 標 地	年 月 日	回 収 地	
1C01		14Mar '76	風 蓮 湖			衰弱体で保護 標識取外す
1C24	J ♀	13Feb '77	小 湊	21Feb '77	浅 所 海 岸	死体で回収
1C39	A ♂	8Mar '77	尾 岱 沼	? Mar '77	尾 岱 沼	〃
1C41	A ♀	〃	〃	〃	〃	〃
1C42	A ♂	〃	〃	?Apr '77	〃	〃
1C46	A	8Mar '78	小 湊	4Apr '78	小 湊	〃
1C59	A	11Mar '78	ウトナイ湖	13Mar '78	ウトナイ湖	〃
1C75	A	15Mar '78	尾 岱 沼	15Jun '78	野 付 半 島	先端部に於て白骨死体で
2C76		9Mar '81	〃	11Mar '78	尾 岱 沼	死亡回収
2C06	J ♂ ?	16Feb '80	小 湊	18Dec '80	大 畑 町	死体で回収
2C07	J ♂	16Feb '80	〃	10Nov '80	槍 昔	〃

2C06と2C07^{*}とは同腹でもあったろうか、共にシベリアとの一往復を目前にして07は尾岱沼の南約37キロメートル、06は小湊から56キロメートルの地点ではたしたのは共に小湊を目指したであろうにと思うとあわれでならない。

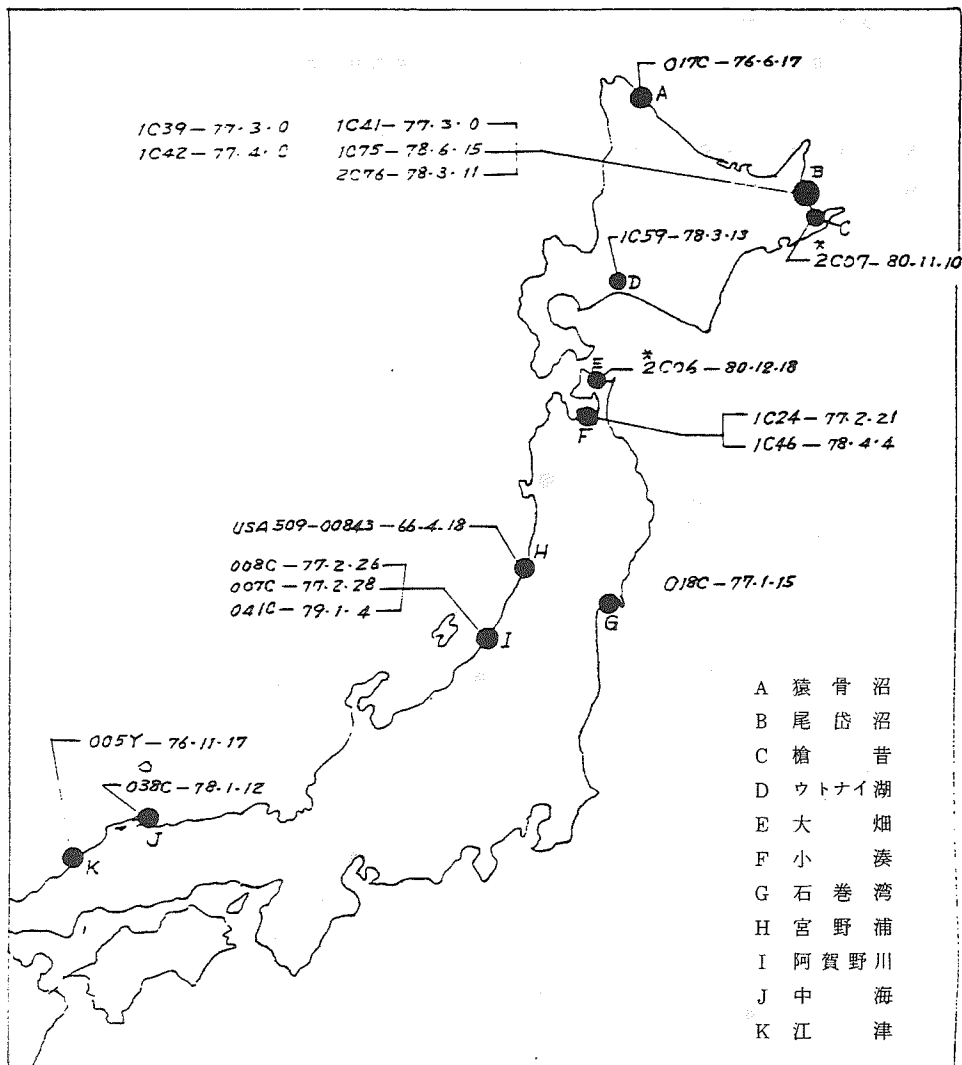
以上のオオハクのほかコハクも含めて回収状況を第3図として次頁に示す。

標識された鳥の死亡原因は何らかのハンディキャップを負っていた鳥とも考えられるが、観察者たちは標識された為に親が子を見捨てたり、子が親を敬遠したり、ペアが分裂したり（以上濤沸湖）又仲間外れにされたり（瓢湖）つき出されたり追いかけられたりして給餌場に近寄れない（濤沸湖・瓢湖）などを目撃している。就中ある期間人工給餌にたよらざるを得ないような鳥の場合は余程気の強い鳥（濤沸湖での1C02や1C10）でない限り人工給餌にありつくことは困難である。ネックバンドの装着は一考を要する問題である。

人工給餌になれている鳥であれば第3表に見た通り観察者の努力でかなりの成果をあげることは可能であり、もっと多くの地点で着標することもできると考える。（ネックバンドの不装着でも……の意）

第3図 標識鳥の回収状況

*北帰の途中高沸湖でリサイトされている。



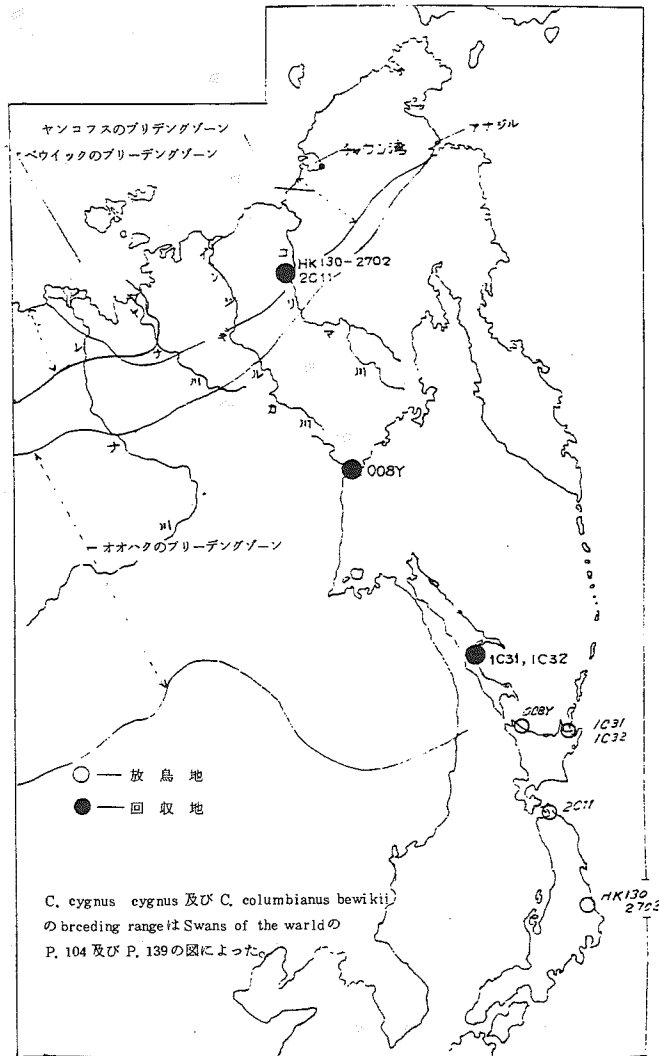
次に国外ソ連極東地域での回収記録も僅かではあるが存在するのでそれについて記してみる。第6表に見るようにコハクチョウも含めて5羽に過ぎないが鎖国時代の長崎出島にも匹敵するものである。

第6表 標識鳥の回収状況(ソ連極東)

記号 No.	年令 性別	着		最終確認		回収		備考
		年月日	地	年月日	地	年月日	ロケーション	
HKI30-2702		14.2.70	古徳沼			25.5.73	67°27'N・153°46'E	
1C31	A♂	7.3.77	尾岱沼	28.3.77	尾岱沼	C.5.77	49°12'N・143°05'E	射殺死体
1C32	A♂	7.3.77	"	16.3.77	"	10~11.5.77	"	"
2C11	A♀?	16.2.80	小湊	29.1.81	小湊	2.6.81	63°30'N・153°36'E	死体
008 Y	J	13.4.76	クッチャロ湖	13.4.76	クッチャロ湖	28.5.76	59°21'N・143°16'E	

これを地図上に記したものが第4図である。どの鳥についても濤沸湖（北海道のどの湖沼でも）での確認記録はない。2702と2C11がコリマ川の中流域で発見されたということは、この地帯はオオハクチョウの繁殖地帯を越えてコハクの繁殖地帯と見做されている所である。^{*}しかし小湊で越冬するオオハクチョウが濤沸湖を利用していることを考えると、濤沸湖を拠点としているオオハクチョウの故郷はこのあたりではないのだろうか。一方1C31、1C32及び008Y（コハクチョウ）の回収地点はハクチョウ類の移動（渡り）経路の一端を示唆するものであろう。

第4図 極東地域における標識鳥の回収

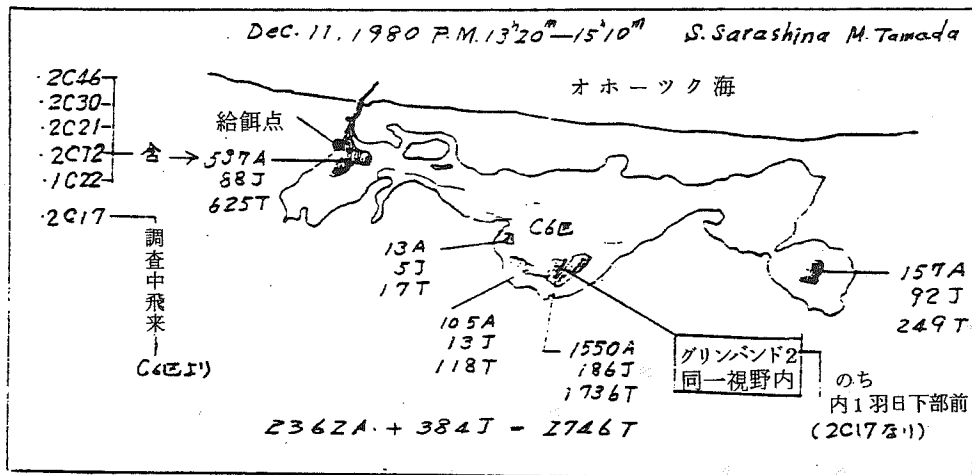


^{*} ベウィックのブリーディングレンジは一応ヤナ川付近までとされており、ヤンコフスキーのそれはレナ川デルタ地域以東といわれる。したがって日本でおなじみのソ連での着標鳥は、その着標地からみてヤンコフスキーということになる。しかし大森氏のレポートによると両者間に差はなく「当然ヤナ川を境界とする二つを分ける呼び方も消滅、学名も統一したもの」になろう。チャウン湾での捕獲時の調査結果はどうなのであろう。A・A・Kistchinski から山階博士あて書かんのコピーを見るとChawn湾での標識鳥はBewick's となっている。

3. 濤沸湖で確認された標識鳥について

濤沸湖で1981年(1982年5月末)までに確認された着標オオハクチョウは第7表に示す通りであつて、1981年春までに着標された通算172羽の18.02パーセントである。このうち尾岱沼での着標鳥に関するものを除くとその確認率は31.76パーセントとはねあがるのである。第7表のうち濤沸湖で着標されたものは繁殖地との間を一往復したのちのみをリストアップしてあり他の着標地のもはそのまま記載してある。また、濤沸湖に飛来したすべての着標鳥を確認したとはいひ難いけれども、ここ数年来秋11月(濤沸湖は未結氷)初旬でさえ給餌地点に寄りつくようになったため飛来したものの確認率はかなり高いものである。1980年12月11日の濤沸湖の様子を第5図として下に示す。

第5図 1980年12月11日の濤沸湖



第7表 濤沸湖で確認された標識鳥

*斜線の部分が未結氷域である。

記号 番号	年令 種別	着 標		確 認 年 期						備 考							
				'76		'77		'78			'79		'80		'81		
		年 月 日	地 名	A	S	A	S	A	S		A	S	A	S	A	S	
1C02	A	15 Mar '76	濤沸湖			①											
1C11	J	15 Mar '76	"	◎	◎	◎	◎										
1C15	J	18 Mar '76	小 湊	◎													
1C20	A ♂	12 Feb '77	"		○												
1C22	A ♀	13 Feb '77	"		◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎				
1C27	A ♂	13 Feb '77	"		◎	◎											
1C28	A ♀	13 Feb '77	"				○										
1C44	A ♂	8 Mar '78	"				○										
1C52		9 Mar '78	"				○										
1C54	A ♀	9 Mar '78	"									◎					
1C56	A ♀	9 Mar '78	"				◎	◎									
1C60	A ♀	11 Mar '78	ウトナイ湖				○										
1C71	A ♂	15 Mar '78	尾岱沼							○							

記号 番号	年令 性別	着 標		確 認 年 数												備 考	
		年 月 日	地 名	'76		'77		'78		'79		'80		'81			
				A	S	A	S	A	S	A	S	A	S	A	S		
1C92	J	17 Feb '79	小 湊							○							
1C96	J ♀	8 Mar '79	尾 岱 沼							○							Jun. 14'79のみ
2C01	J ♂	16 Feb '80	小 湊									○					
2C05	J ♂ ?	16 Feb '80	〃									○					
2C06	J ♂ ?	16 Feb '80	〃									○					80. 11. 10 ×
2C07	J ♂	16 Feb '80	〃									○					80. 12. 18 ×
2C12	A ♂	16 Feb '80	〃										○	○	◎	◎	
2C15	A ♀ ?	16 Feb '80	〃										◎	◎	◎	◎	
2C17	J ♂	20 Feb '80	ウトナイ湖									○					
2C21	A ♀	20 Feb '80	〃									○					
2C30	2 Y ♀	25 Feb '80	尾 岱 沼										①				
2C46	2 Y ♂	28 Feb '80	濤 沸 湖										◎	◎	◎	◎	
2C51	A ♀	14 Feb '81	小 湊												○		
2C52	A ♀	14 Feb '81	〃												○		
2C54	J U	15 Feb '81	〃												◎		
2C60	A ♂	15 Feb '81	〃												①	◎	
2C79	2 Y U	.8 Apr '81	濤 沸 湖												○	○	
2C19	J ♀	6 Mar '81	ウトナイ湖												○		

年期 = 白鳥年……記載年の10月から翌年の5月まで(6月のものも一例ある)

A……秋期…10, 11, 12月 S……春期…1, 2, 3, 4, 5, (6)月

◎……1ヶ月前後 ①……10日間前後 ○……1～数日間 性別のU……不明

次に、濤沸湖で確認された標識鳥を着標地別に分類すると第8表のようになる。本表で見る限り、小湊、ウトナイ湖及び濤沸湖での着標鳥の確認率はかなり高い値を示しているにもかかわらず尾岱沼でのものそれは極めて低いことがわかる。これら3羽の鳥は、越冬期に濤沸湖から尾岱沼に移動して着標されたとする見方があり、尾岱沼で越冬するオオハクチョウは濤沸湖を経由するものは少なくダイレクトにサハ

リンとの間を往来するか、千島列島を経由して渡るのではないか(犬飼)と思われる。

*1C96の濤沸湖でのリサイトは着標年の6月14日で迷鳥のリサイトである。

[A]小湊で着標され移動の途中他の湖沼川で確認されることなく濤沸湖で確認された標識鳥についてリストアップしたものが第9表である。

第8表 濤沸湖に於ける着標別確認数

着 標 地	着標総数	確 認 数	同左パーセント
小 湊	63	20	31.75
尾 岱 沼	87	3*	3.45
ウトナイ湖	10	4	40.00
濤 沸 湖	8	4	50.00
そ の 他	4	0	0.0
合 計	172	31	18.02
尾岱沼を除く	85	27	31.76

*第1表を参照

第9表 濤沸湖で確認された小湊での着標鳥

記号番号	年齢性別	着標年月日	小湊	濤沸湖	小湊
1C15	J	18. Mar. '76		76. Dec. 20	→ 76. Dec. 27
1C20	A ♂	12. Feb. '77		77. Oct. 22	→ 77. Oct. 25
1C22	A ♀	13. Feb. '77		77. Dec. 24	→ 77. Dec. 29
			78.	78. Mar. 25	
1C52		9. Mar. '78	78. Mar. 9	→ 78. Apr. 16	
1C54	A ♀	9. Mar. '78	80. Feb. 16	→ 80. Mar. 20	
1C27	A ♂	13. Feb. '77	77. Mar. 1	→ 77. Mar. 14	
1C56	A ♀	9. Mar. '78	78. Mar. 29	→ 78. Apr. 1	
			78. Dec. 7	→ 78. Dec. 10	
1C92	J	17. Feb. '79	79. Apr. 3	→ 79. Apr. 22	
2C01	J ♂	16. Feb. '80	80. Feb. 28	→ 80. Apr. 24	
2C06	J ♂?	16. Feb. '80	80. Feb. 29	→ 80. Apr. 24	
2C07	J ♂	16. Feb. '80	80. Feb. 28	→ 80. Apr. 24	
2C12	A ♂	16. Feb. '80		80. Dec. 10	→ 80. Dec. 18
2C15	A ♀?	16. Feb. '80	80. Mar. 14	→ 80. Mar. 18	
			81. Feb. 16	→ 81. Mar. 21	
2C15	A ♀?	16. Feb. '80		81. Dec. 16	→ 81. Dec. 25
			82. Mar. 11	→ 82. Apr. 1	
2C51	A ♀	14. Feb. '81		81. Oct. 26	→ 82. Feb. 5
2C52	A ♀	14. Feb. '81		81. Nov. 28	→ 81. Dec. 16
2C54	J U	15. Feb. '81	81. Feb. 16	→ 81. Mar. 20	
2C60	A ♂	15. Feb. '81	81. Feb. 15	→ 81. Apr. 8	
				81. Dec. 4	→ 81. Dec. 13

上表で見ると濤沸湖と小湊の間を1C15、1C20、1C22、1C52、1C54、1C56及び2C15は一週間以内で移動し、特に1C56は中2日しかおいていないことに注目する必要があり、他の標識鳥については小湊と濤沸湖もしくはそのどちらかでの確認もれの公算が大きいように思われる。

[B]次にウトナイ湖で着標され濤沸湖でリサイトされたものについて第10表として下に示す。

第10表 濤沸湖でリサイトされたウトナイ湖の標識鳥

記号番号	年齢性別	着標年月日	ウトナイ湖	濤沸湖	ウトナイ湖
1C60	A ♀	11. Mar. '78		7 Dec. '78	→ 10 Dec. '78
2C17	J ♂	20. Feb. '80		11 Dec. '80	→ 26 Dec. '80
2C19	J ♀	20. Feb. '80	6 Mar. '81	→ 21 Mar. '81	→ 22 Mar. '81
2C21	A ♀	20. Feb. '80		11 Dec. '80	→ 26 Dec. '80

両湖の間をダイレクトに飛行したと思えるのは2C19の濤沸湖からウトナイ湖への唯一例だけであ

る。しかし、両湖に於ける標識鳥のチェックが、完全に毎朝夕行なわれたわけではないし、3月下旬は時期的に他の湖沼川も利用できる状態になっている。

〔C〕最後に尾岱で着標され濤沸湖でリサイトされた3羽について第11表として下に示す。

第11表 濤沸湖で確認された尾岱沼での標識鳥

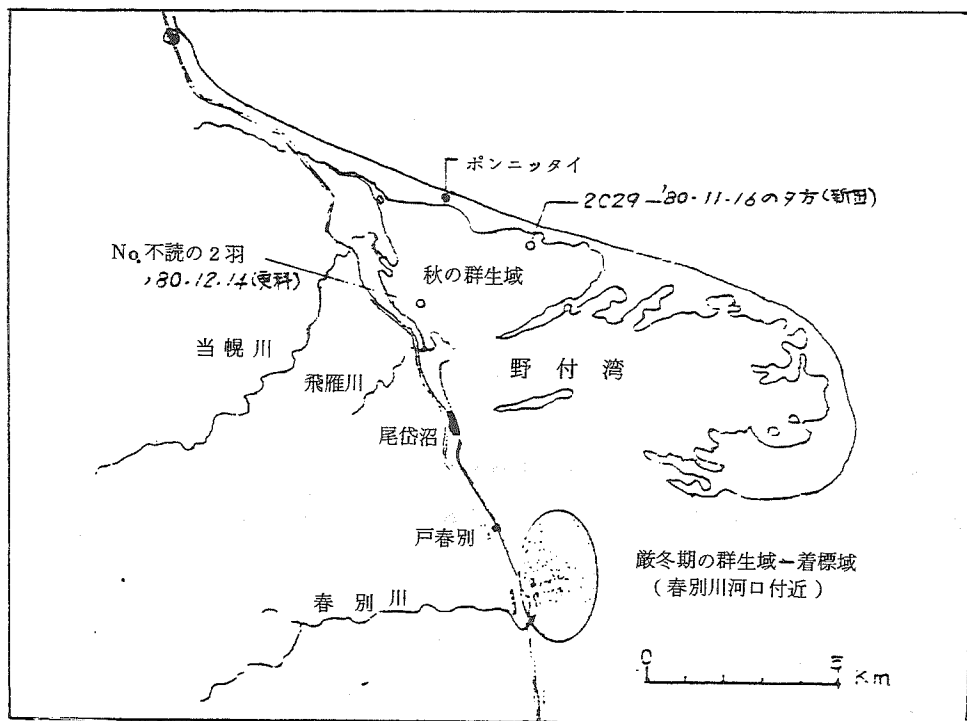
記号番号	年令性別	着標年月日	尾 岱 沼	濤 沸 湖	尾 岱 沼
1C71	A ♂	15 Mar. '78		9. Nov. '79 → 10. Feb. '80	
1C96	J ♀	8 Mar. '79	16 Mar. '79 → 14. Jun. '79		
2C30	2 Y ♀	25 Feb. '80		12. Dec. '80 → (18. Dec. '80)	*

* 2C30のリサイトは屈斜路湖であるがこのうち最上川でリサイト (Jan. 4 ……MaH 2) された。

尾岱沼は厳冬期に白鳥が集るところである。第6図に見るように、その場所は市街地の南5km程の春別川の河口付近であり、秋の渡りの季節に群生しているのは野付湾の北部域や野付半島の湾側であって春もまた同様である。尾岱沼 (春別川河口) における10月~1月の標識鳥の確認記録が皆無に近いのはこうした事情に困るものである。

* 1980年2月25日に尾岱沼で着標された2C29は同年11月16日に尾岱沼でリサイトされたことになっているが、この時期に尾岱沼=春別川河口付近にハクチョウは生息せず、実際は野付半島の付根付近で発見されたものであり、付近ではNo.は読みとれなかったが別の2羽もリサイトされている。→第6図

第6図 尾岱沼付近 (野付湾) 概略図



4. 小湊での着標鳥の濤沸湖以外での確認

小湊で着標された鳥が濤沸湖以外の湖沼での確認状況をまとめたものを尾岱沼（第12表）及びその他の湖沼川（第13表）として次に示す。

第12表 尾岱沼でリサイトされた小湊での標識鳥

記号番号	年齢性別	着標年月日	小湊	尾岱沼	小湊
1C05	A	23. Mar. '75		76. Jan. 16 → 76. Jan. 27	
1C08	A	23. Mar. '75	76. Dec. 10 →	77. Jan. 17	
(1C09)	A	23. Mar. '75		78. Feb. 5 ~ ~ ~	82. Feb. 24
1C15	J	18. Mar. '76	77. Dec. 31 →	78. Mar. 21	
1C28	J ♀	13. Feb. '77		78. Apr. 22	
1C25	J ♀	13. Feb. '77		79. Jan. 4 ~ Feb. 18	
1C44	A ♂	8. Mar. '78		79. Mar. 3, 7, 8*	
(2C06)	J ♂ ?	16. Feb. '80		U*	× (80. Nov. 10)
(2C07)	J ♂	16. Feb. '80		U*	× (80. Dec. 18)

* U……不明（多分通過）

北海道の他の湖沼川を経由して尾岱沼へ、または小湊へ移動したというデータはない。しかし経由しなかったという確証はなく、途中における観察体制の不備からの見落しの公算が大きい。またこれらの鳥はその延長上に濤沸湖に立寄ったという記録も見当たらない。つまり小湊の着標鳥のあるものは濤沸湖を、またパーセントは低いがあるものは尾岱沼を（中にはウトナイ湖等を）経由してシベリアとの渡りを行なっている、との見解をうらがきしているようにも思える。

第13表 小湊での着標鳥の移動

記号番号	年齢性別	着標年月日	確認湖沼川
1C09	A	23. Mar. '75	屈斜路湖 75. 12. 16 → 小湊 75. 12. 20
1C13	A	18. Mar. '76	小湊 76. 4. 1 → 屈斜路湖 76. 4. 4
2C12	A ♂	16. Feb. '80	(濤沸湖) 82. 1. 23 → 屈斜路湖 82. 1. 23
1C22	A ♀	13. Feb. '77	小湊 77. 1. 3 → 厚岸湖 77. 3. 12 * 1
1C26	J ♀	13. Feb. '77	小湊 77. 3. 28 → 塘路湖 77. 4. ?
1C45	A ♂	8. Mar. '78	小湊 78. 3. 8 → ウトナイ湖 77. 3. 16
			(大湊湾) 79. 2. 10 → ウトナイ湖 79. 4. 3
1C48	A ♀	8. Mar. '78	小(大)沼 78. 12. 12 以後定着
2C08	A ♀	16. Feb. '80	小湊 80. 3. 14 → ウトナイ湖 80. 3. 28
2C92		23. Jan. '82	小湊 ? → 様似川 82. 3. 24 * 2
2C95		23. Jan. '82	小湊 ? → 様似川 82. 3. 24 * 3

* 1…1C22 このあと濤沸湖に3月14日より4月7日まで滞在

* 2…2C92 このあと佐呂間湖に4月11日より4月29日まで滞在

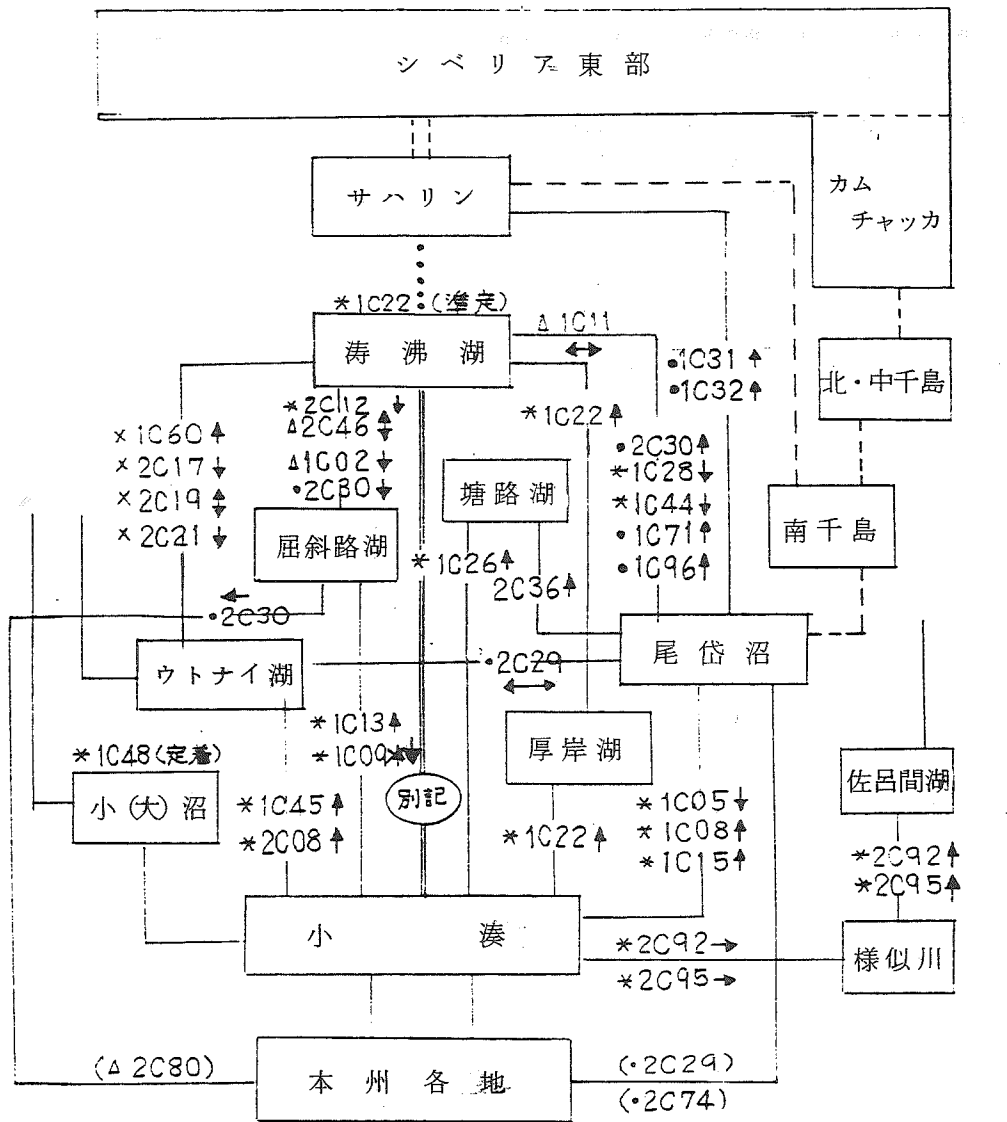
* 3…2C95 同上

*印つきの3羽以外の鳥はその後どこでもリサイトされたデータはないようである。「春は北海道のどこからでもシベリアに向う」とした斉藤春雄氏の説をうら書きしているようにも見える。

又、ウトナイ湖で着標された鳥で尾岱沼で確認された記録は見あたらない。

[付]一年期中に主として北海道内に関係ある二地点以上でリサイトされた標識鳥についてブロックダイアグラム式にまとめたものを第7図として次に掲げる。

第7図 一年期中2地点以上でリサイトされた標識鳥



*小湊での着標鳥 ・尾岱沼での着標鳥 △津沸湖での着標鳥 ×ウトナイ湖での着標鳥

矢印は移動方向 別記の下記標識鳥 小湊 ↔ 津沸湖

1C15	1C20	1C22	1C27	1C52	1C54	1C56	1C92	2C01
←	←	↔	→	→	→	←	→	→
2C06	2C07	2C12	2C15	2C51	2C52	2C54	2C60	2C79
→	→	←	→	←	←	→	↔大湊←	

5. 標識鳥のリサイトについての提言

その鳥自身にとっては、はた迷惑以外のなにものでもない標識作業、そのことを知りつつも敢えてそれを行なっている以上標識鳥についてはよりキメ細かな観察を行なうことを提唱したい。

現在は、標識鳥がどこでリサイティングされたかということに重点がおかれているがリサイト地に於ける終認日と初認日をより絶対値に近付ける様格段の努力をする必要がある。このことは未確認の利用湖沼川の探索と移動経路のより適確な推定に役立つ。

標識鳥の家族構成についてのチェックも重要である。標識鳥はペアを組めるか……何年経ってもペアを組めない鳥はいないか（1 C22はいつペアを組んだのか、成鳥の雌であった彼女はネックバンドの脱落以前からか？以後か？ 今日では確かめる方法がない。）ペアの相手は毎年同じかどうか、幼鳥の数は毎年同じか（鳥相の確認—1 C22は3年間同じ、幼鳥の数は79年期、80年期の幼鳥は5羽、81年期は1羽）（右足にメタルリングのみの他のペアは81年期の秋は5羽の幼鳥を伴っていたが、春再び壽沸湖に姿を見せたとき幼鳥は4羽になっていた。しかし2 C54の標識をつけた幼鳥が常にこの一家につきまっていた。—但し家族の方は特にいじめはしなかったが何となくよそよそしかった。—この一家は小湊で越冬したのである。）

習性（1 C22は餌を散布すると自分の子供が首をのべると、むしろ小供にたべさせるが、他の成鳥や幼鳥は追い散らす。）etc.

我々が注意深く観察すればより多くの習性を知り得る筈である。第3表（ネックバンドの喪失鳥）や第4表（死亡回収）に見るように、バンディングが如何に彼女達に苦痛を強いているか、どこで憩おうが、どちらへ飛ぼうがそれは白鳥の勝手である。着標鳥に何らかの不都合を耐えてもらっている以上われわれの方もより多くのものを得るべく格段の努力をしても良い筈である。標識鳥の記号、番号は気象条件や使用機器にもよるが、その確認は300 m位迄であり（日本の特徴ともいうべき）人工給餌にたよっている鳥を相手にするなら確認率は少々低下するであろうがネックバンドの装着はなるべく早期に打ち切ることを提言したい。

付 録 サハリンのオオハクチョウとの対比

壽沸湖を中継基地としている4,000羽内外のオオハクチョウがサハリンとの間を往来しているという今日的な確証は何ひとつない。強いてそれを求めるなら壽沸湖におけるオオハクチョウはほぼ真北方向に飛去し、真北方向から飛来することと、見落しも考えられるが壽沸湖では確認できなかったが尾岱沼で着標した1 C31、1 C32の2羽が着標年の5月中旬のはじめにポロナイスク（49°12'N、143°06'E）周辺で射殺体で発見されたという報告が得られているだけである。しかし藤巻裕蔵氏の「ソ連極東南部のハクチョウ(I)」……日本の白鳥No.7……の中のサハリンに関する記述には多くの示唆に富んだものがあるので関係部分と壽沸湖のそれを対比してみた。（但しサハリンに関するものは1940、1947、1948、1949年のデータに依るものであり、壽沸湖のものは1971～1980年のものであって両者の間には30年近い年月のへだたりがある。）

1. オオハクチョウの数

「サハリンを通過するオオハクチョウの数は年によって変動するが5,000羽と算定できる」として
いるのであるが、この値は今日濤沸湖を春秋通過するオオハクチョウの数とかなりよく符合する
のであるが、次に述べるようにいささか問題がある。即ち

- a. 「北海道の西海岸からクリリオン（西ノトロ）岬へ飛びススイ（鈴谷）川河口で数日留る」「渡
る数は少ないがアニワ（中知床）半島の西海岸沿いに（北上する群……玉田）……。」があるとし
ている。この後者が前者の分派群ではないと考えればその数（1,000羽内外か？）に問題があるが濤
沸湖を発進したものとの見方もできる。又前者は今日コハクチョウの渡りの経路とはほぼ一致して
いる。^{*1}
- b. 日本で越冬するオオハクチョウの数は概ね12,000羽内外^{*2}と推定されているので、その約60パー
セント強のものについては別途考察しなければならない。（千島列島経由、日本海越えの沿海州経
由）

2. 春の渡りについて

「最近3年間（1947, 1948, 1949）に大量の渡りは4月20～25日……中略5月10日以降に飛来するも
のは見られなかった」ということは濤沸湖における在湖数のピークが4月18日～22日の間に
あることと濤沸湖での終認が5月7日までの間にあることと極めてよく符合していることである。

3. 秋の渡りについて

「大量の渡りが見られるのは11月3日～10日であるがとくに多いのは11月5～6日である。数千羽
の群が主として亜庭湾に現れ、他の近くの湖（富内湖・トンナイ湖、遠洲湖・ブッセ湖のことか……玉
田）には少ない。11月10日以降はいくつかの小群が渡来する。」と。濤沸湖における大群来は極端な早
着年3例を除けば平均11月5日^{*3}となっていてよく一致していることを見出し得る。

若し、30年という時間的ずれとアニワ半島に渡るオオハクチョウの数がクリリオン岬に渡るものに
比べて少ないという点を度外視すれば濤沸湖におけるオオハクチョウの数の変動とサハリン南部にお
ける数の変動とは春秋共に同一群体の移動の結果と見做し得るのではなからうか。

折りこみ図は学習の意味で主として藤巻氏の文にある地名や事柄を地図に記入してみたものである。
所持する地図帖で地名を確認できず割愛したものが多々ある。又沿海州南部とかカムチャッカで営巢
越冬（ペロポリスキー1947、アベリン1949）といったことは頭の中では（何んとなく）理解できて
も地図上には記入できないことである。

*1 ON THE MIGRATION ROUTE OF SWANS IN HOKKAIDO, JAPAN

S. MATSUI 他

PROCEEDINGS SECOND INTERNATIONAL SWAN SYMPOSIUM

1980

I. W. R. B.

*2 第11回ガンカモ科の鳥類調査について 1980

環境庁

*3 秋、濤沸湖における大群来の観察報告 玉田 誠

日本の白鳥 No. 9

謝 辞

濤沸湖に於ける標識鳥については、中には玉田自身によって確認したものもあるが多くは次に掲げる諸君の努力によるもので感謝の意を表する。

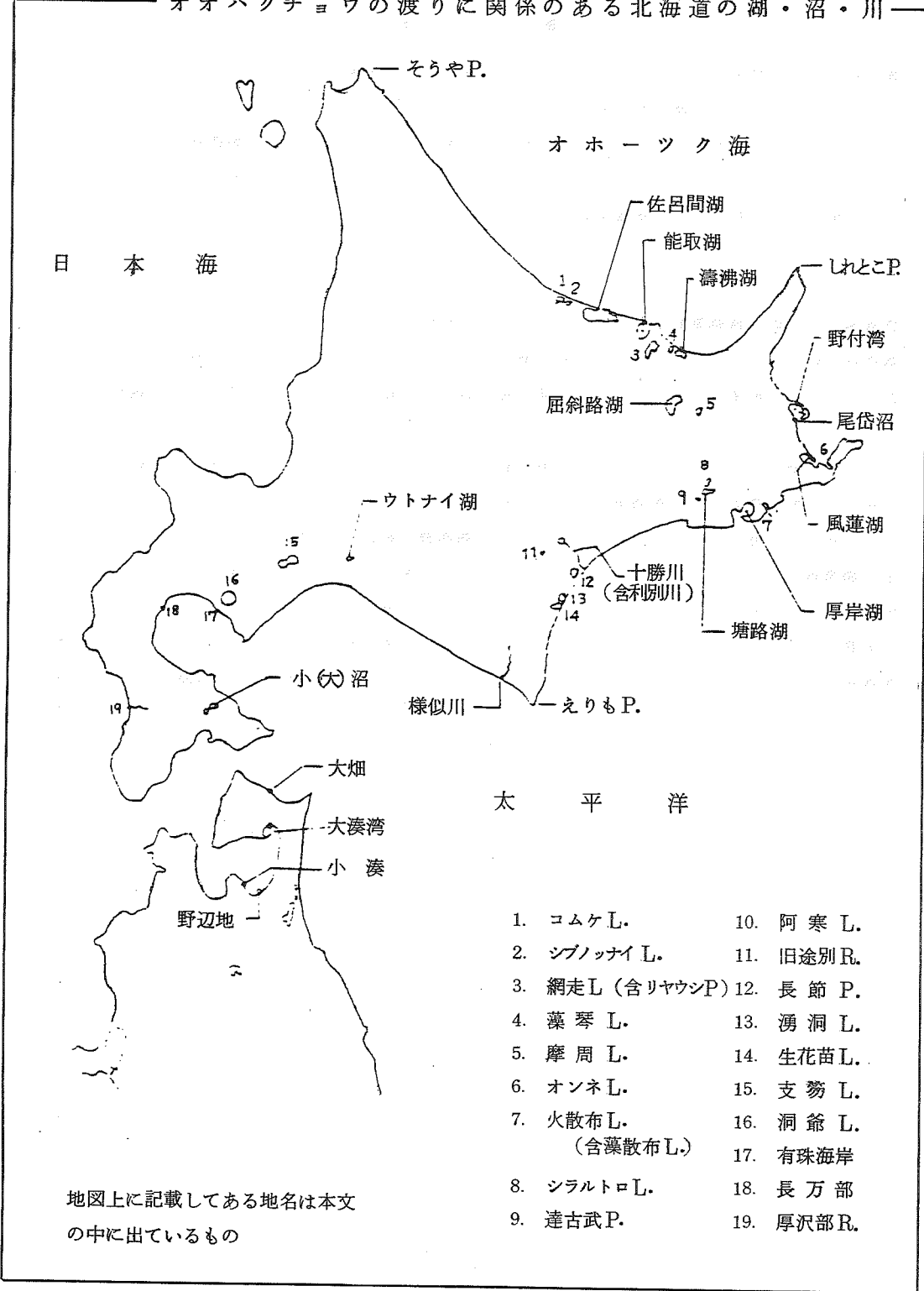
日下部正幸(会員)、新田 令(会員)、金沢裕司(会員)、北浜中学校生徒、又濤沸湖はもとより周辺地域の湖沼川に於ける確認調査に尽力された更科智司、中橋康信の両会員、岡本俊一、山本 勉(元会員)及び石川勝二・(同)、粒針・(同)、麻植智恵子の諸氏

サ マ リ

標識鳥の今日的な確認資料からすれば、次のように要約できる。

- 濤沸湖を経由するオオハクチョウは小湊で越冬したものが大勢を占め、ウトナイ湖でのものがこれに次ぐ。しかして両者共その大部分は北海道の他の湖沼川を経由せず、ほぼダイレクトに濤沸湖との間を往来する。
- また小湊で越冬したものの中でウトナイ湖を経由するものはウトナイ湖から、尾岱沼を経由するものは尾岱沼(野付湾若しくは風蓮湖)から姿を消している。
- そして尾岱沼で越冬するものは、そのほとんどが濤沸湖を経由することはない。
- 春、濤沸湖のハクチョウを見る多くのヒトたちの「この鳥たちはこれから何処へ行くのか」という質問には今もって答えることはできず、それは又われわれの疑問でもある。こうした中であって、日本で着標されたオオハクチョウ4羽とコハクチョウ1羽がソ連の極東地域で回収されたことと「ソ連極東南部のオオハクチョウ」とから日本で越冬するオオハクチョウの繁殖地とその経路とについて極めて示唆に富んだ結果が得られたが、決定的な結論は今後の研究にまたなければならない。

オオハクチョウの渡りに関係のある北海道の湖・沼・川



- | | |
|-----------------|-----------|
| 1. コムケL. | 10. 阿寒L. |
| 2. シブノッナイL. | 11. 旧途別R. |
| 3. 網走L (含リヤウシP) | 12. 長節P. |
| 4. 藻琴L. | 13. 湧洞L. |
| 5. 摩周L. | 14. 生花苗L. |
| 6. オンネL. | 15. 支笏L. |
| 7. 火散布L. | 16. 洞爺L. |
| (含藻散布L.) | 17. 有珠海岸 |
| 8. シラルトロL. | 18. 長万部 |
| 9. 達古武P. | 19. 厚沢部R. |

地図上に記載してある地名は本文
の中に出ているもの

文 献 等 一 覧

- | | | |
|----------------------|---|-------------------|
| 山階鳥類研究所 | 標識白鳥の確認一覧(ブループリント版) | 1977~1981 |
| 山階鳥類研究所 | 鳥類観測ステーション報告 | 昭和54年度・55年度・56年度版 |
| 日本白鳥の会 | 標識白鳥類の観察記録 | 日本の白鳥 vol.1~vol.8 |
| 日本白鳥の会 | 標識白鳥観察報告 | 1980, 1981年期版 |
| 吉川繁男 | 瓢湖白鳥物語 三省堂 | 昭和50年2月20日 |
| 吉川繁男 | ハクチョウと生きる 大日本図書株式会社 | 1979年2月28日 |
| 網走市立北浜中学校 | 白鳥 | vol.1~vol.8 |
| 網走市立北浜中学校 | 白鳥特別号 | vol.1~vol.8 |
| 玉田誠 | 秋・濤沸湖における大群来の観察報告 | 日本の白鳥 vol.9 |
| 本田清 | 白鳥のいる風景 文化・生態・保護 日本放送出版協会 | 昭和54年12月20日 |
| 環境庁 | 第11回ガンカモ科の鳥類調査について 1980 | |
| S. MATSUI 他 | ON THE MIGRATION ROUTE OF SWANS IN HOKAIDO JAPAN
PROCEEDINGS SECOND INTERNATIONAL SWAN SYMPOSIUM | I·W·R·B |
| SYLVIA BRUCE WILMORE | SWANS of the world David and Charles Limited | 1974 |
| 永田洋平 | 新訂 北海道動物記(P87) みやま書房 | 昭和50年11月10日 |
| 北海道庁 | 復刻版 千島概誌(P97) | 1975年 |
| READER'S DIGEST | WIDE WORLD ATLAS The Reader's Digest Association, INC | 1982年 |
| 大森常三郎 | Atlas at Bewick's Swan of the world 及び同解説文 | 1982年1月 |
| 野付中学校 | 昭和46年度鳥獣保護実績発表大会 資料
特に野付湾に飛来するオオハクチョウの観察 | 昭和46年 |
| 別海町 | 白鳥 vol.2 北海道野付郡別海町 | 昭和47年1月 |
| 玉田誠也* | 濤沸湖とオオハクチョウの飛去来について | 1980年 |
| 藤巻裕蔵 | ソ連極東南部のハクチョウ(I) | 日本の白鳥 vol.7 |